慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | リカアド原著、堀経夫訳 経済原論 |
| Sub Title | |
| Author | 加田, 哲二 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1921 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.5 (1921. 5) ,p.757(165)- 759(167) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 新刊紹介 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210501-0165 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蓋、現時に至る迄の經濟學の發達と價値論の發達とは略ぼ其軌を一にせるの觀あり、今假りに今日迄の經濟學を科學的構成以前の時代と之れが以後の時代とに區別し、前期に於ける價値論を以て後の時代に比する時は遙かに貧弱なりとの觀を免れず、即ち希臘、羅馬の時代に於ける價値論が頗ぶる斷片的たることは既に著者の云へるが如し、（頁一七）又た中世の如きも主として Justum Pretium を中心として學說の構成を求めしが如し、然るに後期即ち近世に至つて此方面の研究には著しき發展を齎らすに至り、即ち十七世紀の經濟論をして十八世紀の經濟學を化成せしめしと稱せらるゝ Locke の如き、彼れの需要供給價値說に一歩を進めしものと云はるゝ James Steurt の如き、或は近世經濟學の泰斗たる Adam Smith の如き、更に正統學派經濟學說の全伽籃を礎き上げしと稱せらるゝ David Ricardo の如き、又た彼れの勞働價値說を大成せりと稱せらるゝ Karl Marx の如き何れも此方面に對する最も顯著なる貢獻者なりとす、之れを要するに Petty, Locke に始まる客觀的價値論は Smith, Ricardo を經て J. S. Mill に於て完成の域に達し社會主義の經濟說に於ては Ricardian Socialismus を經て Rodbertus Karl Marx に於て其發達の頂點に達せりとなすが著者の近世的經濟價値論の概觀となす。（頁一四三）

次ぎに以上の兩傾向に對する反對說として利用價値說なるもの發生し、而して此方面の學說に於て特に重要視す可き人々を S. W. Jevons, Carl Menger, Léon Walras となす、即ち前二者は千八百七十一年に於て利用價値論を唱說し、之れに後るゝこと三年にして Léon Walra も亦た此說を唱道せしが、其後、Jevons の學說は英國に於て徐々に承認せられ、Carl Menger の故國たる墺太利は殆んど利用價値說の祖國たる觀を呈せしものなりとす、而して Walras に至りては嚴密なる數學的分析を基礎として Jevons よりも完全なる體系を後ちの經濟學界に提供せしものなりとす（頁一八七、一九四）只だ此利用價値說なるものが經濟學界に於て大なる勢力を有せしに不拘、其內容が妥協的なることは勢ひ社會主義者中より Marx に對する修正派なるものを生むに至りしが如く利用論者の中にも以上の利用說を以て滿足すること能はざるもの輩出し、殊に米國コロンビア大學教授 Clark は其雄なるものなりとす。

之れを要するに著者の現代に對する價値論觀は、之れを以て客觀、主觀兩說の折衷化せしものとなすと共に、將來、此折衷が利用へ歸るか費用へ復歸するかは今後の經濟學の取扱ふ可き問題たることを以てせり。（頁二二二八）

尙ほ後篇主觀的經濟價値論は吾人が前に擧げしが如く W. Smart, An introduction to the theory of Value の極めて流暢なる全譯にして之れが內容は（一）新版序文（二）第一版序文（三）緒言（四）價値の解剖（五）利用と價値との差異（六）價値の階等（七）限界利用（八）限界利用再論（九）補足財（十）主觀的交換價値（十一）主觀的價値より客觀的價値（十二）價格（十三）價格の基礎としての主觀的評價（十四）生產費（十五）限界生產物より生產費へ（十六）生產費より生產物へ其他附錄第一、第二より成り、價値論の最近傾向に就きて知らんとする人の必ず一讀す可きものなりとす。以上、吾人は著者として譯者としての加田君の勞を大となし普ねく價値論に對して興味を有する士の坐右に本書を薦めんとするものなり。（阿部秀助）



## リカアド原著　經濟原論

堀經夫譯

岩波書店發行
四六版四五九頁
定價貳圓五拾錢

「凡そ飜譯については、謂はば印象的の譯し方と寫實的の譯し方と、二種の方法が在り得ると思はれるが、本書は、極めて神經的な寫實の方法に據つた。」（河上博士の序文　三頁）「リカアド經濟原論」は博士の所謂「極めて神經的な寫

賞の方法」によつて譯され、「譯文については、全體の八割までは、私が共譯者としての責任を負担し得る」と博士の云つておられる如く、眞面目なる翻譯である。

然し乍ら、私が本譯書を通讀して得た感じは翻譯の致方が「極めて神經的な寫實の方法」に據ること稍や其の度を過ぎて居りはしまいかと云ふことであつた。次にその例を擧げて見やう。

「著者は、一般に認容され居る意見を反駁するに當つて、より詳細にアダム・スミスの論著中の章句――これを意見を異にするに就き、彼は其の理由を有つて居る所の、――に論及することの必要なるを、發見した。併し、これある の故を以て、彼が、經濟學の重要さを認むる總ての人々と共通に、この著名なる學者の造詣深き著者が正當に喚起する所の賞讃に參與するに、躊躇するものであると疑はれざらんことを、希望して止まない。」（四頁）

この文章を原文と照合して見ると確かに文字の通りである。けれども吾人は一讀して其意義を知ることが困難である。次にリカアドオが賃銀を論じ、賃銀が自由競爭の法則によつて定められなければならないと云ふ點から、救貧法の廢止を主張し、その廢止は貧民の幸福と至大の關係があるから、「之を（救貧法を）吾々の政治組織から安全に取除くことは、最も周到にして、且つ巧妙なる處理を必要とする」と云つた後を受けて、

「若し、其の利益の爲めに此等（救貧法）が誤つて公布せられたる所の、その人々に對する最も恐ろしい苦痛を避けることが望ましいならば、其の廢止は最も漸進的なる手段によつてなるべきであるといふことが、此等の法律の廢止に最も贊成せる人々の總てによつて贊同されて居る。」（一六三頁）

と譯してあるのも、普通の讀者にとつては難解の文章である。この文章の少し前に、賃銀の性質、その決定原因、地代との關係等を論じた後に、

「然らば、次のことは、これによつて賃金が左右され、而してそれによつて各社會の最大たる部分の幸福が支配せらるる所の法則である。」（一六一頁）

とある中の「次のことは」と譯してあるのは原文の "These" であらうが、この意味は「以上論述したところは」と云ふ意味である。これは譯者の考へ違ひであらうと思はれる。

以上のやうに私は批評するのであるが、「原著の性質が、或る程度までは日本文としての理解し易きことを犧牲とするも成るべく原本の字句に忠實ならんことを要求する、と信ずる」（河上博士序文　三頁）立場から云へば、私の批評は或は無意義であるかも知れない。けれども「此等のことは、或る場合には曾に無意味であつたばかりでなく譯文をして却て難澁ならしめたこともあらう」（同上四頁）と云ふことは承認しなくてはならまいと思ふ。

然し翻譯は批評するに易くして、之を行ふに難い。邦文として幾分かの難解を伴ふことは翻譯として免れ難い點かも知れない。この點から云へば、原文に神經的に忠實なる本書はまた大いに私達の參考になることと思ふ。この書はリカアドオ經濟學並に租稅原論中の租稅の部分を除きて經濟原論に關する部分だけが譯出されてゐるので全譯ではないが、リカアドオの寫眞、傳記、索引を附するなど甚だ親切な致方である。私は是丈けでも譯者の努力に謝さなければなるまいと思ふ。妄評多罪。

（加田哲二）